

所蔵品による小企画展

香りのうつわ

2025 1/28 [Tue.] ~ 3/23 [Sun.]

鹿児島市立美術館



小企画展 香りのうつわ

2025 2/18(火) ~ 3/23(日)

香りの文化は、紀元前から 5000 年以上もの長い歴史を持つとされます。宗教儀式における神仏への供香、王侯貴族の間で楽しまれた薫香や香水など、各地域で様々な文化が育まれ、東西の交流を通じて花開きました。

日本では飛鳥時代に仏教の伝来と共に大陸から伝わってきた香りの文化から、鎌倉時代になると香りの中に美を求める香道へと発展し、「香りを聞く」という日本独自の香りの楽しみ方が生まれました。

本展では、香炉や香合、丁子風炉、香水瓶といった、香りを楽しむための器に注目します。繊細な透かし彫りや華やかな絵付けなど超絶技巧が極められた伝統工芸の薩摩焼を中心に、陶芸の宮之原謙、彫金の帖佐美行、薩摩切子の復刻に取り組んだ由水常雄ら、鹿児島ゆかりの近現代作家による作品も紹介します。それぞれに趣向が凝らされた多彩な表現と技法の妙をご覧ください。また、工芸とあわせて、芳香をもつ花木や果物を描いた作品から、香水瓶がモチーフとして登場する作品まで、香りにちなむ絵画も展示します。香りは、「目に見えない芸術」ともいわれます。香りにまつわる作品から、古来暮らしを彩ってきた豊かな文化の一端をお楽しみいただけますと幸いです。

2025年 春号 No.32

発行 鹿児島市立美術館

〒892-0853 鹿児島市城山町4番36号 TEL(099)224-3400

市美だより


鹿児島市立美術館 | KAGOSHIMA CITY MUSEUM OF ART



無料開放日のお知らせ

毎月第3日曜日は、小・中学生は無料開放日です。所蔵作品展 + 小企画展を無料で鑑賞いただけます。

3月16日(日) 4月20日(日)



春の所蔵品展 (西洋美術+郷土作家+特集コーナー)

ミニ特集: 動物たちとのエピソード 会期: 5月18日

当館のコレクションを紹介する所蔵品展では、黒田清輝をはじめとする鹿児島ゆかりの作家の作品、そして20世紀を中心とした西洋美術の流れをたどる作品をご覧ください。今回のミニ特集では、東京・渋谷駅前の忠犬ハチ公銅像の初代制作者、安藤照が没後80年を迎えることにちなんで、絵画や彫刻に作品化された動物たちを、制作のきっかけとなった物語や作家とのエピソードとともに紹介します。

忠犬ハチ公銅像は、飼い主の没後もその帰りを待ちわび、渋谷駅へ毎日迎えに行った秋田犬・ハチの物語をもとに制作されました。戦時中の金属類回収令によって一度は失われましたが、戦後に照の息子・士によって再制作されました。本展では、ハチ公人気を背景に照が制作した小ぶりな像を紹介し、士が再制作した銅像の石膏原型も、1階エントランスでご覧いただけます。

ハチ公像のほかにも、国内外の作家が動物への強い思いを抱いて作品を制作しています。海老原喜之助は、馬に親近感を抱き生涯にわたり描き続けました。イタリアの彫刻家マリノ・マリーニも騎手と馬をテーマとしましたが、これは戦時中に目撃した騎手の落馬シーンに転落後の再生のイメージを読み取ったからです。スペインの画家サルバドル・ダリは、心理学者ジークムント・フロイトを訪ねた際、戸外の自転車に張り付いていたかたつむりに着想を得て作中に登場させています。フランスの画家ジョルジュ・ブラックは、鳥を知性と感性の間を自由に行き来できる象徴的な存在と考え、たびたび描きました。イギリスの彫刻家ヘンリー・ムーアは、象の頭蓋骨を観察し、その形からインスピレーションを広げて、穴の開いた有機的な形の作品を制作しました。



安藤 照 《忠犬ハチ公》素材: テラコッタ 高さ 21.8 幅 9.4 奥行 24.8cm

《ピクアップ》所蔵品紹介

床次正精 《西郷肖像》 1888年頃制作

油彩・キャンバス、縦181×横103・5cm



ここに描かれている人物は、おなじみの西郷隆盛で、西郷が亡くなり、約10年後に描かれました。描いた人は西郷とともに幕末に活躍した薩摩藩士床次正精です。彼は藩主の命令で長崎に行ったとき、イギリス人が持っていた、本物そっくりに描かれた洋画に驚き、それがきっかけで後に画家となった人物です。

時代は明治になり、彼は裁判所検事となりましたが、長崎での感動が忘れられず、独学で油絵研究を続けました。明治11年、アメリカ元大統領ユリシーズ・グラント来日の際、床次が描いた肖像画が評判となり、彼のもとには作画依頼が相次ぎ、裁判所を

やめ本格的に画家となりました。日本近代洋画はじまりの出来事でした。西南戦争で西郷が亡くなるから10年が経とうとするとき、床次と元薩摩藩士の山下房親は西郷の肖像を残す取組を始めました。写真嫌いの西郷の写真は一枚も残っていません。後に描かれた絵も、西郷を知らない人たちが描いたものです。西郷をよく知る床次らは、本物の姿を残したいと、記憶をもとに下書きし、西郷の知人から助言をもらい、修正を続けながら仕上げました。これは西南戦争での西郷の汚名返上を願う薩摩武士たちの行動でもありました。